

被災地の子どものストレスとその関連要因 — 発災後7週めの学校再開時のアンケートによる検討 —

山 本 奨*

(2012年3月5日受理)

Susumu YAMAMOTO

Children's Stress and Influencing Factors in Disaster Area

— Results from questionnaires at a school which resumed after seven weeks after the tsunami —

1 はじめに

東日本大震災の被災地にある各学校にとって、学校を再開することは容易なことではなかった。3月11日の発災後1か月が過ぎても学校を再開できない中、各学校の教師は登校できる条件が整った児童生徒を校内で支援するとともに、登校できない児童生徒については交通手段の確保がままならない中にも関わらず家庭訪問を重ねることで支援した。

このような取組の過程で教師が求めたもののひとつに、児童生徒のストレス反応やトラウマ反応のスクリーニングテストがあった。災害後に子どもたちに特異な反応が生じることやサポートを要する子どもの存在については阪神・淡路大震災を経て教育関係者に知られていたし、この学校再開前にもいわゆる「津波遊び」をしたり退行する子どもたちが現れていた。この状態を放置したらその後どのような深刻な事態になるのか想像できないという不安もあった。学校として何かをしなければならぬことは分かっていたが、どうしたらよいのか分からない焦りのような感情を多くの教師が経験した。そしてサポートを要する児童生徒を見逃さないようにするためのスクリーニングテストを求めたのである。

2 スクリーニングテスト

このような災害後のストレス反応・トラウマ反応について査定するスクリーニングテストとしてはWeiss & Marmar (1997) のIES-Rがよく知られ、改訂出来事インパクト尺度日本語版が作成されている。しかし小学生への適用は困難で中学生を対象とした場合も課題が残る。児童生徒を適用範囲とするものとしては7-17歳を対象とするPynoos, Rodriguez, Steinberg, Stuber, & Frederick (1998) のUCLA-PTSD indexがあるが、その表現は学校で用いられるスクリーニングテストとしては課題が残る。これらの課題を解決するものに、富永・高橋・小澤 (2010) のPTSR-edがある。ストレスやトラウマに関する児童生徒への心理教育の展開時に用いられるもので、これに倣って岩手県教育委員会 (2011) は、「心とからだの健康観察19版 (小学生用)」と「心とからだの健康観察31版 (中, 高校生用)」を作成し、2011年9月に県内全公立小学校, 中学校, 高等学校において「こころのサポート授業」の中で実施している。PTSR-edは多くの自然災害に際して活用され改訂されてきた。これと同じく阪神・淡路大震災に関連して作成・改訂されてきたものに、文部科学省 (2003, 2010) が紹介する「自分を知ろうチェックリスト」や「こころとからだのチェックリスト」,

* 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター

兵庫県教育委員会による EARTH 実践活動スキルアップ調査会 (2006) の「こころとからだのアンケート (児童生徒用)」や「こどもの心とからだのアンケート (保護者用)」がある。そして大震災後の学校再開を前に、多くの学校が探し辿り着いたスクリーニングテストは、これら文部科学省や兵庫県教育委員会によるものであった。本研究において報告する学校も学校再開と同時にこの「こどもの心とからだのアンケート (保護者用)」を中心とするアンケートを実施し、個々の生徒のストレス反応を見逃さない取組と学校全体の抱える課題を把握しようとする取組を試みたのである。

3 コンサルテーション

富永 (2012) は災害後の心理援助に関連し、①子どもへの介入は継続できる人物が行ない心理職はコンサルテーションにあたること、②ディブリーフィングなど感情表現は害になることを考慮すること、③被災者を対象としたアンケートは心理教育や支援とセットで行うことの3点を指摘している。学校に照らしてこれを捉えると、①については支援の主体者は教師であること、②については被災体験の作文を課すなど表現活動を強制しないこと、③児童生徒や保護者を対象としたアンケートを取りっぱなしにしないことと言い換えることもできよう。

その③については課題が残る。上述のように学校再開前後に、支援を要する児童生徒を見逃さないようにとの姿勢で、アンケート項目 (スクリーニングテスト) を探し実施した学校が少なくなく、それぞれの解釈から児童生徒の問題を理解し支援しようとして試みたのである。本研究で報告する学校でそうであったように、多くの教師はこれまでの生徒指導・教育相談で培ってきた技量を用いて適切に介入することが多いように思われた。しかし生徒指導・教育相談に十分な力を備えた教師も、「ストレス」や「トラウマ」に関する知識技能については十分でなかった。心理職でないのであるから当然のことと言えるが、そのことから「もっ

と深刻な状況にある児童生徒を見逃していないだろうか」「いま採っている支援方法は誤っているのではないだろうか」との不安が、教師の本来の指導力を阻害する傾向が見られた。ここにアンケート結果を、心理職の立場から読み取り、支援を要する児童生徒に注目しその介入方法を探るといふコンサルテーションのニーズが生じたのである。実際、この時期被災地の学校を巡回すると、このような学校独自に実施したアンケートを見られることがしばしばあった。本研究で報告する学校もそのような状況にある学校のひとつであった。

このような経緯から、支援を要する生徒を弁別するだけでなく、個々の生徒の状況や課題を整理するとともに、学校全体の傾向を捉え今後の支援方針を定めるための分析が必要となり、当該校よりコンサルテーションを求められた。そして分析の結果は個々の生徒の支援に活用されたのである。このような大震災直後のストレスやトラウマに関する情報は外部からは接近困難なものであるが、今後の災害対応に有益な示唆を提供するものと考えられた。その意義に鑑み関係者の同意の下、これについて報告することとした。

目的

本研究では東日本大震災で被災した中学校の学校コンサルテーションを通して提供された情報を分析することで、災害に曝された児童生徒が呈するストレス反応や不安の諸相について、被災時の校種や当該児童生徒が呈した恐怖反応、客観的な被災状況との関係から明らかにすることを目的とする。併せて災害後に求められる児童生徒の心のサポートに資する知見を得ようとするものである。

方法

1 学校の概要

当該校は、東日本大震災で甚大な津波被害を受けた或る市町村の公立中学校である。海岸からはやや距離があるため校舎・校地に津波は到達しな

かったが、校区の一部は浸水した。各学年1クラスであり、全校生徒は40人に満たない小規模校であった。

2 保護者対象の調査

調査対象 当該中学校に通う生徒35人の保護者(父親や母親など誰が回答するかは家庭の判断に任された)。

実施時期 2011年4月25-27日(学校再開と同時であった)。

調査手続き 学級担任が生徒をとおして保護者にアンケート用紙を配布し、数日後の締め切り日までに、生徒をとおして提出するよう求めた。個別の支援と全校生徒の傾向を整理するためとの調査の趣旨が学校から保護者に伝えられ、同意された家庭から回収された。調査は記名式で行われた。

調査材料 兵庫県教育委員会が設けるEARTH実践活動スキルアップ調査会(2006)が作成したこどもの心とからだのアンケート(保護者用)を一部改変追加した。下記の(2)と(3)が、生徒の反応に影響する可能性があるとの判断により学校が追加したものである。

(1) **自宅の被害**: 「なかった」と「少しあった」「かなりあった」「非常にあった」の合わせて4つの選択肢からひとつを選択するよう求めた。

(2) **被災者の自宅受入状況**: 被災者の自宅への受け入れについて「いない」と「いる」の選択肢により回答を求め、「いる」場合にはその人数の記入を求めた。

(3) **経済的環境の変化**: 「仕事に影響」の表現を用いて経済的環境の変化について「ある」と「ない」により回答を求めた。

(4) **恐怖反応**: 保護者からみた子どもの恐怖反応について、「こわがらなかった」「少しこわがった」「かなりこわがった」「非常にこわがった」の4段階で回答を求めた。

(5) **A項目群**: ストレス反応を主に情緒面から捉えるための13項目について、「かなりはい

「少しはい」「いいえ」の3段階で回答を求めた。

(6) **B項目群**: ストレス反応を主に身体面から捉えるための13項目について、「かなりはい」「少しはい」「いいえ」の3段階で回答を求めた。原版にある「13嘘をついたり、盗みや薬物乱用等の行動をする」については、この調査手続きで問うには不適切な項目だと学校が判断しこれを削除した。

(7) **C項目群**: ストレス反応を主に行動面から捉えるための13項目について、「かなりはい」「少しはい」「いいえ」の3段階で回答を求めた。

3 生徒対象の調査

調査対象 当該中学校に通う生徒35人

実施時期 2011年4月28日

調査手続き 学級担任が学級活動の時間に質問紙を配布しその場で回答を求め回収した。実施に際して、個別の支援と全校生徒の傾向を整理するためとの調査の趣旨が伝えられ、気分がすぐれない場合は途中で回答をやめてもよいことが言い添えられた。調査は記名式で行われた。

調査材料1 「生活悩み調査」の名称で、次の5領域の各項目について「強く悩んでいる」「少し悩んでいる」「悩んでいない」の3段階で回答を求めた。

(1) **勉強について** (「勉強に集中できないので悩んでいる」など10項目)

(2) **進路について** (「将来の進路がわからないので悩んでいる」など6項目)

(3) **家庭環境について** (「家庭に心配なことがあるので悩んでいる」など8項目)

(4) **学校生活について** (「部活動のことで悩んでいる」など7項目)

(5) **友人関係について** (「友人との仲がうまくいかないで悩んでいる」など5項目)

調査材料2 「不安に思うことや相談したいことがあったら記入してください」の間により記入を求めた。

結果と考察

I 結果の整理

1 度数への変換

今回の生徒・保護者への問は測定そのものを目的としたものでなく、個々の生徒の状況の把握とその蓄積から学校の課題を理解するために実施されたものである。また、大震災直後の混乱の中で行われたものでもあった。また保護者や生徒も未だ日常生活を回復させ得ない中での回答となった。これらのことから複数の選択肢によった問も、その程度が測定できるものではないと判断し、原則として、『あった』か『なかった』かの2値で整理することとした。具体的には次のとおりとした。

- (1) **自宅の被害**: 「少しあった」「かなりあった」「非常にあった」の3を『あり』とし『なし』との2値とした。
- (2) **被災者の自宅受入状況**: 自宅への受け入れがある場合はその人数に関わらず『あり』とし『なし』との2値とした。
- (3) **経済的環境の変化**: 『あり』と『なし』との2値とした。
- (4) **恐怖反応**: 各項目について「かなりこわかった」「非常にこわかった」を恐怖反応『あり』とし「少しこわかった」「こわがらなかった」を『なし』とする2値とした。「少しこわが

った」をここで『なし』としたのは、震災規模を考慮するとこの選択肢は通常の範囲の反応と考えられたためである。そこでこれを『なし』と合わせることで、便宜的に『なし』と表現することとした。

(5) **生活悩み調査**: 各領域についていずれかひとつの項目でも「強く悩んでいる」「少し悩んでいる」と回答した場合にはその領域について『あり』とし「悩んでいない」を『なし』とする2値とした。

(6) **ストレス反応**: 「かなりはい」と「少しはい」を『はい』とし『いいえ』との2値とした。

2 ストレス反応の分類

(1) A項目群

A項目群はストレス反応の主に情緒的側面について捉えようとするものであるが、その内容は一様でない。そこでクラスター分析を用いて項目を分類することを試みた。データには各項目の回答の2値を、近似の指標にはパターンをの差異を、樹状図化にはウォード法を用いた。その結果、25分の14までで結束する2グループが見いだされた。その結果を **FIGURE 1** に示した。

第1グループは「12親や先生に反発したり抵抗したりする」「14震災について繰り返し話したり、関連した遊びをする」「08物を壊したり、投げたりする」「05風呂、トイレにひとりで入れない」「06風呂、トイレ、部屋などのとを開けたままでないと怖がる」「02いらいらしやすくちょっとしたことで怒る」「11自分の部屋などに閉じこもったままになる」「09趣味やレクリエーションに興味を失う」「10感情がうつめとなり、悲しくなったり涙もろくなったりする」「01落ち着きがなくなる」「07ひとつのことをずっと続けていられない」「03学校に行くのをいやがる」「04遊び仲間や友だちをさける

- 12 親や先生に反発したり抵抗したりする
- 14 震災について繰り返し話したり、関連した遊びをする
- 08 物を壊したり、投げたりする
- 05 風呂、トイレにひとりで入れない
- 06 風呂、トイレ、部屋などのとを開けたままでないと怖がる
- 02 いらいらしやすくちょっとしたことで怒る
- 11 自分の部屋などに閉じこもったままになる
- 09 趣味やレクリエーションに興味を失う
- 10 感情がうつめとなり、悲しくなったり涙もろくなったりする
- 01 落ち着きがなくなる
- 07 ひとつのことをずっと続けていられない
- 03 学校に行くのをいやがる
- 04 遊び仲間や友だちをさける

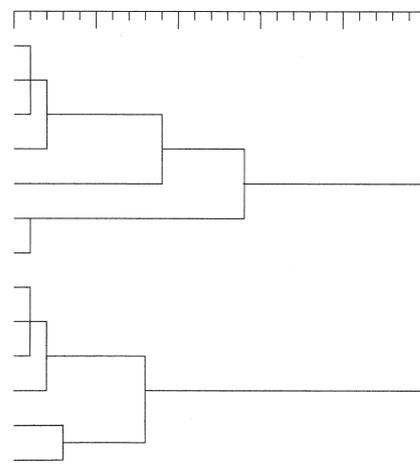


FIGURE 1 A項目群のクラスター分析結果

で『行動化』と命名した。第2グループは「09趣味やレクリエーションに興味を失う」「10感情がうつめとなり、悲しくなったり涙もろくなったりする」「04遊び仲間や友だちをさける」などによって構成されるものであったので『抑うつ』と命名した。

各グループについていずれかひとつの項目でも『あり』といっている場合はそのグループの反応を『あり』、いずれの項目も『なし』としている場合にはそのグループの反応を『なし』と整理することとした。

(2) B項目群

B項目群はストレス反応の身体的側面について捉えようとするものであるが、その内容は一様でない。そこでクラスター分析を用いて項目を分類することを試みた。データには各項目の回答の2値を、近似の指標にはパターンの差異を、樹状図化にはウォード法を用いた。その結果、25分の8までで結束する2グループが見いだされた。その結果を **FIGURE 2** に示した。

第1グループは「18チックが出たり、聴力が低下したりする」「20皮膚や目をかゆがったり、こすったりする」などによって構成されるものであ

ったので『特異反応』と命名した。第2グループは「15頭痛や腹痛を訴える」「17寝つきが悪かったり、何度も目が覚めたり、反対に眠くて寝てばかりという状態がよくある」「16食欲不振や吐き気を訴える」などによって構成されるものであったので『身体反応』と命名した。

各グループについていずれかひとつの項目でも『あり』といっている場合はそのグループの反応を『あり』、いずれの項目も『なし』としている場合にはそのグループの反応を『なし』と整理することとした。

(3) C項目群

C項目群はストレス反応の行動的側面について捉えようとするものであるが、その内容は一様でない。そこでクラスター分析を用いて項目を分類することを試みた。データには各項目の回答の2値を、近似の指標にはパターンの差異を、樹状図化にはウォード法を用いた。その結果、25分の4までで結束する、あるいは25の指標まで結束しない1項目からなる3グループが見いだされた。その結果を **FIGURE 3** に示した。

第1グループは「27親に抱きついたり、ひざに乗ったりなど、身体接触を要求する」「22親の気

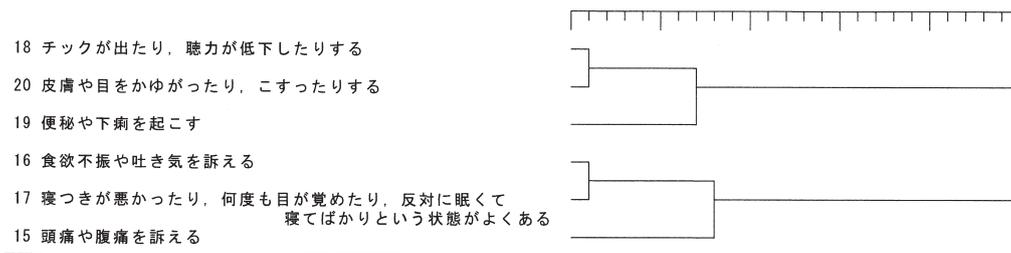


FIGURE 2 B項目群のクラスター分析結果

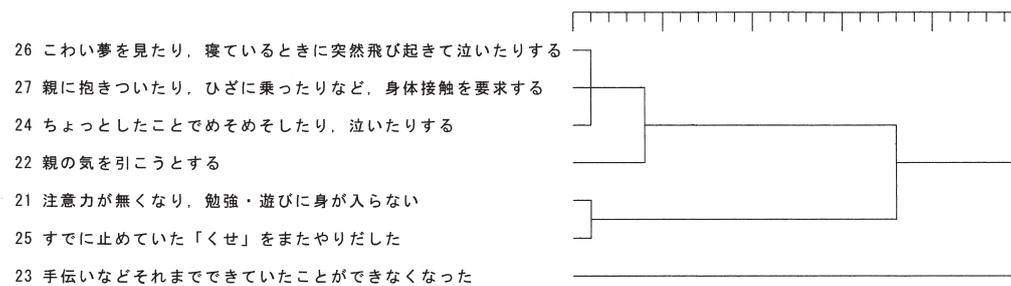


FIGURE 3 C項目群のクラスター分析結果

を引こうとする」などによって構成されるものであったので『依存傾向』と命名した。第2グループは「21注意力が無くなり、勉強・遊びに身が入らない」などによって構成されるものであったので『注意散漫』と命名した。第3グループは「23手伝いなどそれまでできていたことができなくなった」によって構成されるものであったので『役割放棄』と命名した。しかし『注意散漫』と『役割放棄』については十分な項目数がまとまらず、そのようなグループ化が成立するのか課題が残った。しかし不適當と判断する材料も得られていないことから、この時点では削除しないこととした。

各グループについていずれかひとつの項目でも『あり』といしてる場合はそのグループの反応を『あり』、いずれの項目も『なし』としている場合にはそのグループの反応を『なし』と整理することとした。

3 「不安」の内容

「不安に思うことや相談したいことがあったら記入してください」の問に対して21件の反応があった。これを研究者と当該校教師1名により、分類の一致を確認しながら下のとおり3つのカテゴリーを作成した。

(1) 高校進学

このカテゴリーは、「目標にしていた高校が津波でなくなってしまい、どこに行けばいいのか思いつかばない」「〇〇高校がなくなってしまったが、いつ戻ってくるのかははっきりしない」「がんばれば〇〇高校に入れようと思っていたのに、その目標がなくなってしまった」などによるものであった。目標の喪失を地元の高등학교の被災・仮移転により表現したものと捉え、『高校進学』と名付けた。

(2) 部活動

このカテゴリーは、「部活動の大会がこれからは行われるのか心配」「グラウンドも体育館も使えない状態なので練習ができるのか心配」「部活動の練習をしたいけれど、この状況の中でそんなことをしていてもよいのか」などによるものであ

た。日常生活の喪失を部活動と関連させて表現したものと捉え、『部活動』と名付けた。

(3) 漠然

このカテゴリーは、「最近いろいろ怖いことがあって歩きたくない」「いつまでも余震が続くけどまた大地震が起きないか心配」「久しぶりに学校に来たら周りがよそよそしかった」「勉強が手につかない」などによるものであった。様々なことが手につかないという不安に由来するものと捉え、ここでは『漠然』と名付けた。

II ストレス反応、不安・悩みと諸条件との関係

1 分析の目的と条件間関係

(1) 分析の目的

以下では、[発災時の校種]つまり小学生であったのか中学生であったのかの違い、[恐怖反応]の有無、[自宅の被害]の有無、[被災者の自宅受入]の有無、[収入への影響]の有無の5つの条件が、上で分類された各ストレス反応や記述や選択肢によって表現された不安・悩みとどのような関係があったのかを、その度数を用いて直接確立計算により明らかにする。なお本研究は十分には実施環境が統制されない実践場面で得られた情報を用いていること、被災時に生じる傾向を捉えようとするものであることを考慮し10%水準の有意傾向を扱うものとする。また検定に際しては片側検定を行う。

(2) [被災者の自宅受入]と[自宅の被害]との関係

[被災者の自宅受入]については、自身の自宅に被害がなかったために他の被災者を自宅に受け入れることができたとも考えられた。そこでこれらの関係を度数を用いて確認することとした。その結果、有意な関係は認められなかった(TABLE 1)。このことから以下ではこの2つの条件を独立した別のものと捉えることとした。

(3) 校種と4つの条件の関係

5つの条件による反応等の差異を追究する前に、校種の異なりが他の4つの条件の差異を生じさせていないかを、直接確率計算により確認する

TABLE 1 被災者の自宅受入と自宅被害の関係

		あり	なし	<i>p</i>	ϕ
		14	21		
自宅の被害	あり	11	12	.173	
	なし	3	9		

†*p*<.10 **p*<.05 ***p*<.01 (片側検定)

TABLE 2 発災時の校種と各条件の関係

		中学生	小学生	<i>p</i>	ϕ
		21	14		
自宅の被害	あり	10	13	** .000	.466
	なし	11	1		
被災者の自宅受入	あり	9	5	.473	
	なし	12	9		
収入への影響	あり	4	3	.594	
	なし	17	11		
恐怖反応	あり	3	9	** .003	.516
	なし	18	5		

†*p*<.10 **p*<.05 ***p*<.01 (片側検定)

こととした。

その結果、[自宅の被害]は校種による差が有意で、当時小学生であった子どもの家庭の方がこれを多く受けていることが分かった。これは中学校に進学するにあたり、津波の被災を受けた地域の生徒が、学区を変えて当該校に入学したことも影響しているものと考えられた。この後の結果の解釈にあたっては、それが校種によって生じた差異なのか『自宅の被災』による差異なのかを考慮する必要があることが示された。

さらに[恐怖反応]も校種による差異が有意で、当時小学生であった子どもの方がこの反応を呈しやすいことが示され、これを考慮した解釈が求められることとなった。[被災者の自宅受入]と[収入への影響]は有意でなかった。これらの結果をTABLE 2に示した。

2 発災時の校種

[発災時の校種]による違いをTABLE 3に示した。発災時小学生であった生徒のストレスは『行

動化』『身体反応』を示すことが中学生よりも有意に多く、不安・悩みは選択肢による『家庭環境』をあげることが有意に多かった。また発災時中学生であった生徒の不安・悩みは記述における『高校進学』『部活動』をあげることが有意に多かった。

これらのことは、ストレス反応は小学生の方が中学生よりも生じやすく、そのストレス反応は行動や身体に表出されることを示すものだと言えた。さらに保護者の顔色をうかがう様子も見られることが示されたと言えよう。その一方、中学生では高校進学のような目標の喪失に関することや部活動のような日常生活の喪失に関することを訴える傾向が示された。つまり、小学生は行動や身体にストレス反応が表れ家族との関係が課題となりやすく、中学生は学校や進路に関連する喪失が課題となりやすいという傾向である。

岩手県教育委員会が2011年9月に実施した「心とからだの健康観察」でも、高校生や中学生に比べて小学生の反応が高い傾向が見られたが、スト

レス反応についてのこの傾向はそれと一致するものと言えよう。また、同教育委員会が4-5月に展開した「こころのサポートの授業1」で取り上げられた5項目のストレス反応と比較すると、その「むしゃくしゃしたり、いらいらしたり、かつとしたりする」は本研究の『行動化』と、また「ごはんがおいしくないし、食べたくない」や「頭やお腹が痛かったり、からだの調子が悪い」は本研究の『身体反応』と一致するものだと考えられた。特に小学生についてはこのような反応が典型例であると理解してよさそうである。

一方、中学生に対しては、学校や進路に関連して想起される喪失感についてどのように支援していくのが課題だと言えよう。これまで災害後のストレス反応やその後のトラウマ反応について、ライフキャリアや役割、価値観との関連が検討されることは少なかったが、今回の大震災ではこの問題が提起されていると捉えることができよう。

3 恐怖反応

[恐怖反応]の有無による違いをTABLE 3に示した。[恐怖反応]が見られない場合は、ストレス反応では『行動化』『抑うつ』『特異反応』『身体反応』『依存傾向』を示すことが有意に少なく、あるいは有意傾向であった。不安・悩みでは[恐怖反応]が見られない場合『高校進学』『漠然』をあげることが有意に少なかった。

これらのことは、恐怖反応のストレス反応との強い関連を示したものと言える。今回ストレス反応を行動化など7つのグループに整理して検討したが、『注意散漫』と『役割放棄』については十分な項目数がまとまらず課題のあるグループであることを先に指摘した。またこの2つの反応については、この後論じる『自宅の被害』などを含めていずれの条件とも関連をもたないことが示されている。この2つを除いた残りの5つのストレス反応のグループ全てについて、[恐怖反応]と正の関係があることが示されたのである。

TABLE 3 発災時の校種、恐怖反応とストレス反応、不安・悩みの関係

		発災時の校種				恐怖反応					
		中学生		小学生		あり		なし			
		21	14	p	φ	12	23	p	φ		
ストレス反応	A 項目群	行動化	あり なし	4 17	8 6	.025*	.393	7 5	5 18	.038*	.365
		抑うつ	あり なし	3 18	5 9	.143		6 6	2 21	.011*	.466
	B 項目群	特異反応	あり なし	4 17	4 10	.398		5 7	3 20	.070†	.323
		身体反応	あり なし	1 20	6 8	.010**	.466	5 7	2 21	.033*	.391
	C 項目群	依存傾向	あり なし	2 19	4 10	.157		4 8	2 21	.089†	.310
		注意散漫	あり なし	0 21	2 12	.153		2 10	0 23	.111	
役割放棄		あり なし	1 20	1 13	.647		1 11	1 22	.575		
不安・悩み	記述	高校進学	あり なし	7 14	0 14	.017*	.408	0 12	7 16	.036*	.361
		部活動	あり なし	7 14	0 14	.017*	.408	1 11	6 17	.217	
	漠然	あり なし	4 17	3 11	.594		0 12	7 16	.036*	.361	
	勉強	あり なし	16 5	12 2	.406		9 3	19 4	.453		
選択肢	進路	あり なし	14 7	9 5	.583		7 5	16 7	.382		
	家庭環境	あり なし	3 18	7 7	.029*	.387	5 7	5 18	.198		
	学校生活	あり なし	7 14	5 9	.583		2 10	10 13	.112		
	友人関係	あり なし	1 20	3 11	.165		2 10	2 21	.425		

†p<.10 *p<.05 **p<.01 (片側検定)

ところでこの反応は保護者から見た子どもの様子を評価したものであり、また中学生よりも小学生の方が表出しやすい反応でもあった。そして小学生は保護者の顔色をうかがう傾向が見られた。つまりこの反応は小さい子どもの方が表れやすく、その恐怖を感じた子どもは保護者を頼りにしたがる傾向があると考えられよう。怖がるという感情に保護者が介入する機会は十分にあり、これを軽快させる介入をすることでストレス反応を軽減できる可能性を示したものである。竹中・冨永(2011)は今回の大震災でも大人が子どもに安心感を与える介入が重要であることを指摘し、主に教師による支援を提案している。教師から保護者にその介入姿勢と介入手法を伝えることが、ストレス反応軽減の手立てになると言えよう。

そしてこの恐怖反応が小さい場合は、目標の喪失や漠然とした不安について語るができることも、今回の結果は示している。ここで有意となった『高校進学』も『漠然』も、選択肢によらず

自由記述により生徒が教師に訴えたものである。そのことから恐怖反応を小さく処理することができた場合、生徒はストレス反応に頼ることなく、落ち着きの中で自らの言葉を用いて内面にある課題を表現しながら解決に向かうことが指摘できよう。災害時、教師が面談という形で生徒が感情や記憶について表現する作業に寄り添うことの意義はそこにあると考えられる。

4 自宅の被害

これについてTABLE 4に示した。[自宅の被害]の有無については、ストレス反応と不安・悩みの全てにおいて、有意な偏りは見られなかった。

このことは、このような客観的な被災状況がストレス反応の多寡を決定するものではないことを示したものだと言えよう。

被災状況は分かりやすい外因であることから教師の注意を集めやすい。実際、岩手県教育委員会も「心とからだの健康観察」を実施するにあつ

TABLE 4 自宅の被害,被災者の自宅受入,収入への影響とストレス反応,不安・悩みの関係

			自宅の被害		p	φ	被災者の自宅受入				収入への影響			
			あり	なし			あり	なし	p	φ	あり	なし	p	φ
			23	12			14	21	28	7				
ストレス反応	A 項目群	行動化	あり なし	8 4	4 8	.618		2 12	10 11	.045*	.344	8 20	4 3	.163
		抑うつ	あり なし	5 18	3 9	.571		3 11	5 16	.602		6 22	2 5	.516
	B 項目群	特異反応	あり なし	4 19	4 8	.267		0 14	8 13	.009**	.444	7 21	1 6	.484
		身体反応	あり なし	5 18	2 10	.547		3 11	4 17	.594		4 24	3 4	.125
	C 項目群	依存傾向	あり なし	5 18	1 11	.311		1 13	5 16	.209		6 22	0 7	.232
		注意散漫	あり なし	2 21	0 12	.425		0 14	2 19	.323		1 27	1 6	.365
不安・悩み	記述	役割放棄	あり なし	2 21	0 12	.425		2 12	0 21	.153		2 26	0 7	.635
		高校進学	あり なし	3 20	4 8	.163		4 10	3 18	.270		5 23	2 5	.432
	選択肢	部活動	あり なし	3 20	4 8	.163		3 11	4 17	.594		5 23	2 5	.432
		漠然	あり なし	4 19	3 9	.453		2 12	5 16	.406		5 23	2 5	.432
	選択肢	勉強	あり なし	17 6	11 1	.217		11 3	17 4	.594		21 7	7 0	.176
		進路	あり なし	14 9	9 3	.327		8 6	15 6	.304		16 12	7 0	.036*
	選択肢	家庭環境	あり なし	7 16	3 9	.530		2 12	8 13	.125		6 22	4 3	.084†
		学校生活	あり なし	7 16	5 7	.382		2 12	10 11	.045*	.344	8 20	2 5	.665
	選択肢	友人関係	あり なし	3 20	1 11	.575		0 14	4 17	.114		2 26	2 5	.170

†p<.10 *p<.05 **p<.01 (片側検定)

て、教師記入欄を設け客観的な被災情報を記録し後任の教師に情報を引き継ぐシステムを構築しようとしている。この情報は軽視すべきではない。しかし客観的な被災がないことを以てこれを安心材料だと考えてしまうと、支援を要する子どもを見逃すことになってしまう。今回の結果はそのような注意すべき視点を提供していると言えよう。ただし、本研究では家族など重要な人物の喪失体験については検討していない。上記の傾向は自宅の被害などの物損に限定して理解すべきだと考えられる。

さらに今回の大震災にあつては、津波被害のあった沿岸のことを「被災地」と呼び、内陸にあつてはあたかも被害がなかったように扱われることが多い。例えば盛岡の中学校の生徒会活動で見られる「被災地を支援する活動に取り組む」などの表現はその例である。同時に盛岡の小学生の特に低学年の児童の中には、発災当日、停電の中で迎えに来られない保護者を寒い体育館の中で深夜まで待ち泣き出すという経験をした者もいる。被災状況の評価は相対的なものである。今回の大震災にあつては、普段であれば相当の被害とされるものであっても、沿岸の津波浸水地域に比べれば軽微なものと思なされてしまう。この自宅の被害と前項の恐怖反応に関する結果は、一見被災地に見えない地域の子どものストレス反応にも留意すべきであるとの注意を喚起するものと言えよう。

5 被災者の自宅受入

これについてTABLE 4に示した。[被災者の自宅受入]の有無については、これを行っている場合ストレス反応の『行動化』や『特異反応』を示すことが有意に少なく、不安・悩みの『学校生活』をあげることも有意に少なかった。

このことは、自宅に家族以外の被災した住人が同居する環境では、子どもの家庭内での乱暴な言動や通常の身体反応以外のチックなどの特異な反応は押さえられる傾向にあり、本人自身は学校生活にトラブルがないとする傾向があることを示し

ている。つまり、家に他人が同居する緊張の中で、子ども自身がその目を気にして、あるいは保護者の躰により、家の中ではおとなしくして、久しぶりに再開された学校生活に楽しみを見つけようとしているということになろう。

この質問項目は兵庫県教育委員会によるものでなく当該校が独自に入れたものである。それは学校再開前、家庭訪問を行い生徒の安全とストレス反応などを見取ろうと努めた教師の観察を基に、そのような環境で暮らす子どもたちの緊張の影響を考え、追加したものであった。この結果は、その教師たちのアセスメントの成果を支持するものと言えよう。

そしてこのような統制は発災後2か月内であったために維持することができたとも考えられる。教師が生徒の緊張を理解し、リラクゼーション技法を教え、あるいは学校生活の中で熱中できる体験を提案・提供することが、その後の不適切なストレス反応の表出を避けることにつながると考えられた。

7 収入への影響

これについてTABLE 4に示した。[収入への影響]を受けてる場合、不安・悩みの『進路』をあげることが有意に多く、『家庭環境』をあげることは少なかった（有意傾向）。

このことは、大震災により保護者の収入が減った場合、子どもは進学をはじめとする進路のことについて悩みを抱えるが、保護者との関係については気を遣い良好に保つよう意識しているとの様子を示していると考えられた。

また、ここでの『進路』は質問項目への反応であり自由記述によって得られたものではないことから、『高校進学』のような目標の喪失などライフキャリアに関連する問題ではなく、学費は払えるのだろうか、隣の市にある高校に行きたいけれど通学のバス代が高いので親に迷惑をかけそうだ、など極めて具体的な課題だと想像できよう。そして子どもは保護者への気遣いからその質問を言い出せず、その曖昧さが新たなストレスに

なると同時にそれがストレス耐性を脆弱にもしている。一方保護者の側も子どもに余計な心配を負わせまいとして、現状について、例えば実際には大きな問題ではなかったとしても、言い出せないでいる。さらにその保護者の躊躇が子どもに気遣いをさせる。このような隘路に入り込んでいる状況が、そこにはうかがえる。山本(2011)は大震災に伴う環境の変化から進路の問題に悩む場合には、曖昧さのない具体的で正確な進路情報が、子どものストレス反応の軽減に役立つことを指摘している。上述した目標の喪失や漠然とした不安に寄り添うという比較的抽象度の高い支援に取り組む前に、情報提供という明確で効果の高い支援があることをあらためて認識したい。

8 総合的な考察と今後の課題

(1) ストレス反応

今回、クラスター分析で得られたグループを再整理すると、行動に現れたと考えられるストレス反応として『行動化』が、情緒に現れたと考えられるものとして『抑うつ』『依存傾向』に2つが、身体に現れたと考えられるものとして『特異反応』『身体反応』の2つの合計5グループが見いだされたと言えよう。『注意散漫』と『役割放棄』は扱うべきグループとして採り上げることができなかった。

ストレス反応の表出パターンとしては行動、情緒、身体、思考の4つが扱われることが多く、岩手県教育委員会が大震災後に展開する心理教育でもこの4つが紹介されている。今回の結果では思考以外の3つが扱われ、ストレスの概要をよく捉えられているものと言えよう。

今回採り上げた諸条件との関係では、情緒に現れた『抑うつ』と『依存傾向』の2つは諸条件との検定結果が同じパターンであったことから、あらためて区別する必要はなく、ひとつの情緒の反応と捉えてよいと考えられた。一方、身体に現れた『特異反応』『身体反応』の2つは校種や被災者の受入において異なる結果となった。『特異反応』は校種によって影響されないことや、家族以

外の人との同居によって表出が押さえられることから、災害後ふつうに生じる『身体症状』とは異なるものであることが示唆された。

このようなことから、今回捉えられた子どものストレス反応は、行動、情緒、身体と『特異反応』の4つであったと考えられた。その意味でチックや搔痒など『特異反応』の扱いは今後の検討課題とされた。

(2) 不安・悩み

自由記述からは高校進学、部活動、勉強などへの不安が見受けられた。選択肢への回答との比較から、これらは喪失や漠然とした不安など、見逃せない重要なテーマを語るものだと考えられた。高校進学や部活動についての具体的な相談だと理解して対応するだけでは、これらの子どもに適切に介入することができないとの示唆である。

発災時小学生であった子どもには、行動や身体に現れる典型的なストレス反応がよく見られることが今回の検討からは分かっているが、中学生に対してはこれに加えて、ライフキャリアや役割、価値観に関係する課題への対応が求められていることが指摘された。

(3) 各条件による差異

このことについては上で詳述したので、各条件間の差異を比較する。本研究では5つの条件を用いた。この中で子どものストレス反応や不安・悩みに強く関連していたのは、発災時の校種と恐怖反応の経験であった。小学生の方が中学生よりも行動化や身体反応を表出しやすく家族との関係も気にする傾向が見られた。また恐怖反応を経験した子どもは、ストレス反応を表出しやすいことが分かった。さらに上の(2)不安・悩みに関連して目標の喪失や日常生活の喪失については、中学生の方が小学生よりも表出する傾向にあり、これについて恐怖反応を経験した場合には表出できなくなる可能性があることが示されたと言えよう。

これらに反して自宅の被害についてはストレス反応や不安・悩みに関連しないことが分かった。そして、自宅に家族以外の被災者を受け入れている場合には、むしろ行動化やチックなど特異な反

応は押さえられ学校生活に期待する様子がうかがえた。また家庭が収入への影響を受けている場合は自宅への被害と同様ストレス反応には関連しないが、進学など具体的な進路への悩みを大きくする一方、気遣いから家族との関係を安定させようとする傾向がうかがえた。

(4) 保護者への支援

今回の分析で用いられたストレス反応のデータは、保護者の観察によるものであった。ここでの分析結果を考慮すると、行動、情緒、身体に現れる各反応への保護者の観察と評価は妥当なものであったと考えられた。富永(2012)が指摘するように、子どもに対するストレス反応やトラウマ反応へのアンケートは慎重でなければならない。そのとき、保護者は有力な情報提供者となり得ることを今回の結果は示していると言えよう。

そして保護者は情報提供者としてだけではなく、重要な支援者となり得ることに注目したい。保護者は発災以来子どもを観察し続けたのではなく支え励まし続けていたからこそ、子どもの状態を正確に捉えられたと考えられる。当該校が行ったように、アンケートの結果を受けてまず保護者に情報を提供し、次に子どもを支援する方法とともに検討する取組をすることが大切であろう。アンケートからスタートした学校と家庭との情報連携関係を、介入という行動連携の関係に進展させる取組である。

同時に、保護者自身も被災者であることを忘れてはならない。保護者の見立てる子どもの状態は、保護者のストレス反応の反映である可能性もある。当該校の教師も細心の注意を払ったように、日常における学校不適応状態への支援と、この点で異なることに留意したい。

(5) スクリーニングテストの選定とコンサルテーション

今回のアンケートは、大震災後の子どもの反応を心配に思う学校によって実施された。そこで使用された項目は、子どもの様子を正確に捉えられるものであること、学校で実施することが適当であること、作成経緯が明確であることなどが当該

校によってよく吟味されたものである。上述の各反応と各条件の関係の検討結果は、教師の判断の正しさを支持するものと言えよう。

しかし、その選定と作成について、ストレスやトラウマについての専門家でない教師だけに頼るのは適切ではないだろう。当該校でもふつうの教育活動の様に十分な自信の基にこれを行ったわけではない。またその後の活用との関係には改善の余地も見られた。さらに今回の検討から、自由記述での問いかけと選択肢を用意した場合には、回答のレベルが異なることが分かった。これらのことから、発災直後からの心理臨床面からのコンサルテーション担当者の派遣の必要性を指摘できよう。この大震災にあつては、東日本大震災心理支援センター(2011)などが直後からweb上で多くの有益な情報を提供した。この情報の正しい意味と学校をつなぐ役割を執る心理臨床の専門家の派遣である。

上の(4)保護者への支援では、保護者自身も被災者であることの理解が重要であることに触れたが、ここでは教師自身も被災者であることの理解が重要である点を指摘したい。本研究は、被災者である教師が、被災者である子どもたちをストレスやトラウマから守ろうと、被災者である保護者に連携を求めて、混乱の中であっても使命感をもって実施したアンケートを分析したものである。コンサルテーションを行う場合、学校や教師の被災にも配慮し、これらによる教育の機能が回復されるよう支援することが重要だと言えよう。

謝辞

本研究の基となる生徒・保護者支援に係るコンサルテーションとデータの分析をご依頼いただきました校長先生をはじめ先生方に深く感謝申し上げます。生徒・保護者の皆様には適切な支援がなされ穏やかで健やかな環境が回復されることをお祈り申し上げます。また得られた知見の公表にご同意くださいましたことに御礼申し上げます。

文献

- EARTH 実践活動スキルアップ調査研究会 2006
震災・学校支援チーム EARTH ハンドブック
- 東日本大震災心理支援センター 2011 東日本大震災心理支援センターホームページ：
URL:<http://www.jpssc.biz/>
- 岩手県教育委員会 2011 心とからだの健康観察
19版（小学生用）.
- 岩手県教育委員会 2011 心とからだの健康観察
31版（中，高校生用）.
- 文部科学省 2003 非常災害時における子どもの心のケアのために改訂版.
- 文部科学省 2010 子どもの心のケアのために―災害や事件・事故発生時を中心に―.
- Pynoos,R., Rodriguez, N., Steinberg, A., Stuber, M. & Frederick, C. 1998 UCLA-PTSD index, UCLA Trauma Psychiatry Service, Los Angeles.
- 竹中晃二・富永良喜 2011 日常生活・災害ストレスマネジメント教育―教師とカウンセラーのためのガイドブック―. サンライフ企画.
- 富永良喜 2012 大災害と子どもの心―どう向き合い支えるか―. 岩波ブックレットNo.829. 岩波書店.
- 富永良喜・高橋哲・小澤康司 2010 災害・事故後の心理教育のためのトラウマティック・ストレス尺度（Post Traumatic Stress Reactions Scale for Psychoeducation;PTSR-ed）の作成の試み―台風23号豪雨災害被災地の小学4年生から中学3年生を対象に. ストレスマネジメント研究, 7, pp.3-8.
- Weiss, D.S.&Marmar, C.R. 1997 The Impact of Event Scale-Revised. In: Wilson,J.P.,Keane,T. M.eds,Assessing Ppsychological trauma and PTSD,The Guilford Press, New York, pp399-411.
- 山本奨 2011 ストレスを抱えるこどもには大人の手助けが必要です. いわてグラフ, 第729号, 岩手県秘書広報室広聴広報課.